

【原 著】

「教師力養成講座」2017年度の概要と9年間の取組
— 実践的指導力を有する教師の育成のために —

武藤 幹夫 河内 智美 小林 清太郎

An Outline of the Training Program to Cultivate Abilities Required for Teachers in the Last 9 years
To Cultivate Practical Leadership Required for Teachers

Mikio BUTO, Satomi KOCHI, Seitaro KOBAYASHI

2018

岡山大学教師教育開発センター紀要 第8号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.8, March 2018

原 著

「教師力養成講座」2017年度の概要と9年間の取組

— 実践的指導力を有する教師の育成のために —

武藤 幹夫^{*1} 河内 智美^{*1} 小林 清太郎^{*1}

教師力養成講座は、学校現場で実践されている優れた取組を学生に伝えることで、教職への漠然とした不安を取り除き教師という仕事への意欲を高めるとともに、学生の実践的指導力の向上を図ることをねらいとしている。2009年から9年間実施しており、受講学生の多くから、「教職を目指す上で役に立つ」という肯定的な評価を得ている。これまで随時開催してきたこの講座を、より定着したものにする方策として、2018年度からの授業化に向けた取組を進めている。

キーワード：実践的指導力の向上、9年間の取組、講座の授業化

※1 岡山大学教師教育開発センター

I はじめに

教職を目指す学生は、教師という仕事に就ける期待とともに、指導にかかわるいろいろな不安をかかえている。それは、授業、学級経営、生徒指導、保護者との関係など教師の仕事全般にわたっている。日々の学校現場をあまり知らない学生にとっては、当然のことである。今学校では、社会から期待される学校の役割が変化していくことに伴って、様々な課題への対応が求められている。そうした状況の中で、それぞれの学校には、学校の現状に合わせた指導を進め確かな成果を上げている優れた教師がたくさんいる。しかし、学校現場の課題は、解決の困難さや労働の厳しさとしてマスコミ等の報道を通して伝えられることも多い。それが教師を目指す学生には、教師という仕事に就くことへのもう一つの不安になっている。

そこで、教職を目指す学生に学校現場の現状と優れた実践を紹介し、教師という仕事の素晴らしさを伝えるとともに実践的指導力の向上を図りたいと考え、「教師力養成講座」に取り組んだ。講座では、優れた実践を進めている教師等に講師を依頼し、学校で行われている取組の概要やその教育理念を話していただき、受講者のグループワークで考えを深めている。

その講座が9年目を迎えた。これまでの取組をまとめるとともに、これから進めようとしている教師力養成講座の授業化の概要についても触れておく。

II 2017年度の実践

2017年度も、年間7回の講座の開催を計画している。ここでは、本年度講座(6回、7回は実施予定)の取組の概要とともに、「岡山大学教師教育開発センター紀要第7号」で全体を報告できなかった2016年度講座の取組の概要を報告する。2年間の講座の概要は[表1]に示したとおりであり、それぞれの年度で7回の講座を実施し、14名の講師を招いている。

【表1】2017年度・2016年度の講座内容

2017年 5月24日	第1回	「授業これだけは！」 【講師】岡山市教育委員会事務局 職員
6月28日	第2回	「特別の教科『道徳』の授業づくり」 【講師】岡山市立小学校 校長
7月12日	第3回	「子ども理解を基盤にした学級づくり」 ～子どもと教師、子ども同士のつながりから～ 【講師】吉備中央町立小学校 校長
7月26日	第4回	「教師になるための根っこの話」 【講師】赤磐市立小学校 校長
12月13日	第5回	「子どもを理解し、子どもを導く」 ～特別支援教育の視点から～ 【講師】岡山県教育庁 職員
2018年 1月24日 (予定)	第6回	「小中の連携について考える」 ～「つながる」をキーワードにして～ 【講師】岡山市立小学校 校長
1月31日 (予定)	第7回	「アクティブ・ラーニングを実現させるために」 【講師】岡山市立中学校 指導教諭
2016年 5月25日	第1回	「『教員に求められる使命感や責任感、教育愛』について」 【講師】岡山市教育委員会事務局 職員
6月22日	第2回	「学級を中心とした集団づくり」 【講師】総社市立中学校 校長
7月 6日	第3回	「生徒指導とクレーム対応」 ～これからの教師に求められていることを考える～ 【講師】岡山市教育委員会事務局 職員
7月20日	第4回	「学級経営をする上で大切にしたいこと」 【講師】岡山市立小学校 教諭
12月21日	第5回	「『人の気持ちがわかる教師』とは」 【講師】岡山市立中学校 校長
2017年 1月11日	第6回	「学ぶ意欲を高める授業づくり・学級づくり」 【講師】岡山市立小学校 教諭
1月25日	第7回	「授業づくりのコツ」 【講師】岡山大学教育学部附属中学校 教諭

1 テーマの設定

テーマについては、これまでどおり「学生が不安に思っている教育課題」「学生に学んでおいてほしい教育の動き」という視点から設定した。

「学生が不安に思っている教育課題」については、毎回実施するアンケートをもとに設定した。2017年度4回までのアンケートの分析結果からとらえた学生が設定を希望するテーマは、下のとおりである。多岐にわたっているが、これまでの実施内容を加味しながら、テーマ設定に生かしている。

○生徒指導 9

「生徒指導」「いじめ」「トラブルとその対応」「非行への対応」

○学級経営 8

「学級経営」「中学校の教育」「高校の教育」

○授業 6

「アクティブ・ラーニング」「授業の導入」「授業の実際」「授業構成」

○連携 5

「保護者や地域との関わり」「チーム学校」「地域・保護者との連携」

○特別支援教育 4

「生徒指導」「インクルーシブ教育」「集団の中での支援」「授業への集中」

○子ども理解 3

「子どもの実態、困り感を捉える」「児童理解」「子どもとの信頼関係」

○情報教育 3

「情報教育」「ICT機器の利用と活用法」

○学校保健・安全 2

「発達障害・食物アレルギー」「学校保健・安全教育」

○その他

「キャリア教育」「部活動の指導」「教師になるために知っておくべきこと」

「人権教育」「異文化理解教育」等

「学生に学んでおいてほしい教育の動き」については、2017・2018年度には、「教師像」「授業づくり」「特別の教科道徳」「アクティブ・ラーニング」「小中連携」を組み込んで実施した。

2 受講者の講座に対する意識

2016年度（7回）と2017年度（1～4回）の計11回の受講後アンケートからまとめた受講生の講座に対する意識は、次のとおりである。

○講座で考えたことは、あなたが教師を目指す上で役立つと思いますか。

・「とても役立つ」 72～97%

・「とても役立つ」＋「どちらかと言えば役立つ」 97～100%

○次回の講座にも参加したいと思いますか。

・「参加したい」 76～85%

・「参加したい」＋「どちらかと言えば参加したい」 91～100%

この講座に対する肯定的な反応は9割以上になっており、「教師という仕事への意欲を高め、学生の実践的指導力の向上を図る」という講座開催のねらいについては、一定の成果を上げている。一方で、「学生が積極的に参加できる講座にする」という面から見ると、グループワークへの参加の仕方は開催講座ごとによりかなりの違いが見られる。開催に当たっては、講座のねらいの伝え方や時間配分の計画などを含めた事前の打ち合わせの改善を図りたい。

○グループでの話し合いは、活発に行われましたか。

・「とても活発」 16～74%

・「とても活発」＋「どちらかと言えば活発」 75～100%

○グループでの話し合い中、あなた自身の発表はどうでしたか。

- ・「とても積極的」 22～ 64%
- ・「とても積極的」 + 「どちらかと言えば積極的」 75～100%

3 学生の感想

受講生アンケートの自由記述欄に記載された感想や意見を、「講座内容への共感や発見」「講座の運営や雰囲気」「自分が教壇に立つことへの意欲や思い」に分けて整理し、その一部を紹介しておく。(記載時に、誤字や漢字表記等について最小限の校正をしている。)

(1) 講座内容への共感や発見

- 算数の授業づくりは少し難しかったですが、小学校や中学校専修の方と一緒に考えることができ勉強になりました。また、養護教諭として子どもの心身の健康を守っていくために重要な学びを得られて本当に良かったです。
- めあてが二つの構成要素(学習内容と学習方法)でできているというお話にとっても納得しました。私たちの班では学習内容しか「めあて」に挙がっていませんでしたが、学習方法を学ぶことがいっそう大切であると意識していきたいです。
- 「これから」よりも「今まで」に注目し、しっかりと価値を落とし込む事が大切だということが心に残りました。実習で道德の授業が上手くできなかったのですが、今思えば「こうすれば良かったな」というヒントが沢山あって非常に有意義な講義でした。
- 具体的な子どもとの関わり方の各事例は、自分がこれから生きていく上で、為になりそうなお話ばかりでした。「子ども理解」の内容がこれほど深いものとは思いませんでした。

(2) 講座の運営や雰囲気

- 他の課程・コースの人と子どもについて話し合うのは、自分の視野が広がり、子どもを見る視点が増えるので、他の先生方との繋がりを持つことが大切であると改めて感じました。学校生活の中のみならず、家庭・生育歴などから子どもを多角的に見るよう心掛けたいです。
- グループワークがとても良い勉強になりました。養護教諭の視点以外からの意見を多く聞いたことで、考え方の幅が広がりました。また、子供たちが見ているのは「関わろうとする心」というお話も心に響きました。忘れまいと思います。
- 普段は関わることのない学部生や、他校種を目指している人と交わって意見を交換することで、視野が広がったり、教育現場で働いておられる先生のお話を聞くことができ良かったです。子どもを中心軸として、自分に何が出来るかを考えていきたいです。
- 問題行動をやめるように働きかけるだけでなく、代わりの行動を考えるとというのが自分にとって新しい考え方でした。グループワークでは意見を出してくれた人に頼ってしまい、あまりグループに貢献できなかったのがタイミングを見計らって意見を言えるようにしたいです。

(3) 自分が教壇に立つことへの意欲や思い

- 授業のめあてと導入を考えるだけでも沢山考える要素があり、正直非常に難しかったです。それでも、子どもたちに学んで欲しいことを考えたり、話し合ったりするのが楽しく、教師になりたいという思いが強くなりました。
- 実際の授業を見せていただき、具体的な子どもの反応や発問の仕方などが理解できました。学習指導要領でのポイントの解釈の仕方、多面的・多角的に考えることがよく分かりました。ポイントを踏まえて授業づくりができる様にしたいです。
- 生徒理解の様々な視点について知ることができ、現場でどの様な学級経営をしていきたいかというビジョンが少し持てました。
- 私は「子どもを理解する教師」を理想の教師像としているので、今日のお話を聞いて、気付きやもっとこうしたいという思いが数多くありました。これからも「困っている子」の目線に立って考えられる様に頑張ります。教師って本当に魅力のある職業だと強く感じました。
- 学校支援ボランティアで、よく暴言を吐く児童に出会ったことがありました。「恐いなあ」と思っていました。が、「どうしたの？」と聞くと何故イライラしていたか教えてくれました。本日のお話も「関わる」ことの大切さについてでしたので、これからも粘り強く関わっていきたいと思いました。
- 国語の教材研究が自分自身にとって大変おもしろいと感じました。子どもが持つ、多様な気持ちを受け止められる教員になりたいです。
- 「わがまま」と「障がい」に違いがあるのかということは特に印象に残りました。どんなことがあっても指導や支援をすることは不可欠なので、障がいの有無ではなく、その子に合った対応ができるようにしたいと考えています。

Ⅲ 9年間の取組から

授業化によって新たな形でスタートする「教師力養成講座」について、これまで9年間継続してきた58回（予定講座を含む）の取組を整理した。

1 テーマの設定

テーマについては、次の二つの視点で設定した。

[視点A] 教師を目指す学生が不安に思っている教育課題とそれに対する学校現場での取組

[視点B] 学生に学んでおいてほしい教育の動き

教師力養成講座を受講した学生にアンケートを依頼している。その中に「取り上げてほしいテーマ」の項目を設定し、[視点A]にかかわるテーマを設定している。[視点B]については、教職相談室で項目設定をしている。

これまで9年間で取り組んできたテーマをキーワードをもとに[表2]に整理した。ただ、1回の講座の中に複数の要素が組み込まれていることも多く、その講座の内容のすべてを正確に反映し切れていない点がある。

テーマは、前年や前々年の実施テーマを考慮し、学校教育について幅広く取り上

げるようにしている。また具体的なテーマの設定にあたっては、「学生の不安の解決につながるもの」という視点を大切に設定している。

【表2】テーマに取り上げた内容<予定も含む> (回)

(年度)	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
生徒指導	2	1	0	1	4	0	2	1	0
学校運営	4	2	2	1	1	2	3	2	3
学級経営	0	0	1	2	1	2	2	3	1
教科指導	0	3	3	1	1	3	0	1	3
(合計)	6	6	6	5	7	7	7	7	7

○生徒指導 11回

「いじめ・不登校」「生徒指導の課題への対応」「クレーム対応」「子ども理解」等

○学校運営 20回

「求められる教師像」「学校や地域との連携」「人権教育」「特別支援教育」等

○学級経営 12回

「学級づくり」「叱る・褒める」「人間関係をつくる」等

○教科指導 15回

「授業づくりと教材研究」「言語活動」「外国語教育」「アクティブ・ラーニング」等

【取り上げた内容をもとに課題に焦点を当てて整理したもの】

○魅力ある授業 10回

(授業づくり3、協同学習3、教材研究2、言語活動、アクティブ・ラーニング)

○教師に求められる資質 8回

(学級経営の力2、教師の心得、若い教師として、使命感と責任感、教科指導、集団づくりの力、子ども理解)

○魅力ある学級 8回

(学級づくり2、人間関係づくり2、子ども理解、学級びらき、褒める・叱る、授業で学級を創る)

○学校力の向上 5回

(学校間・地域連携3、学校力、評価)

○生徒指導の課題とその対応 4回

(問題行動への対応3、体罰)

○情報教育 4回

(課題と指導の進め方3、情報機器の活用)

○いじめ・不登校の現状と指導の進め方 3回

○クレーム対応 2回

○各種教育 14回

「特別支援教育」3「英語・外国語活動」2「道徳教育」2「キャリア教育」2

「人権教育」「武道と伝統文化」「理数教育」「N I E教育」「食育」

2 講師の選定

講師については、岡山県教育委員会、岡山市教育委員会の協力を得て選定している。学校現場において指導や対応で優れた実践をしておられる人材を、学校に勤務する校長、教頭、教諭、教育委員会事務局職員等の中から選定し依頼している。9年間の講師について、その立場、所属、勤務地から整理した。

(1) 講師の立場・所属から

講師の立場から年度毎の変遷を整理すると、[表3]のとおりである。

この講座の開始時には、校長に講師を依頼していた。その後、受講生の希望などを生かす中で、実際の指導について具体的な指導の姿が伝えられるように、授業や学級経営を日々実践している教諭への依頼が増えてきている。さらに、学校という組織の運営や役割を伝えるために、校長・教頭だけでなく教育委員会事務局職員への講師依頼も行っている。

講師の所属は、公立小学校23人、公立中学校21人、教育委員会事務局7人、県立高等学校3人、岡山大学教育学部附属学校3人、岡山大学教師教育開発センター1人と、公立の小中学校に講師を依頼することが多くなっている。学生が目指す校種の割合等も考慮して、そうした傾向になっている。高校教師をめざす学生が多い課程認定学部の学生の受講も想定して高等学校からも3名の講師をお願いした。自分が目指している学校だけでなく他の学校種の実践を理解しておくことも教師としての大切な力の一つある。講師の学校種の幅を広げることは、今後の課題として、検討したい。

【表3】講師の立場

(年度)	校長・教頭	指導教諭・教諭	教育委員会職員	センター職員
2009	6			
2010	4	1		1
2011	3	3		
2012	2・1	3		
2013	2	1・1	3	
2014	3	4		
2015	5・1	1		
2016	2	3	2	
2017	4	1・0	2	
計	32人	18人	7人	1人

【所属】

＜校長・教頭＞ 32人

公立中学校16、公立小学校14、県立高等学校2

＜指導教諭・教諭＞ 18人

公立小学校9、公立中学校5、大学附属学校3、県立高等学校1

＜教育委員会職員＞ 7人

岡山市教育委員会事務局 5、岡山県教育庁 1、倉敷市教育委員会事務局 1

＜センター職員＞ 1人

岡山大学教師教育開発センター 1

(2) 講師の勤務地域

講師が勤務する地域は、岡山市が47人で全体の8割を超えている。講座の開催は平日で学校の授業日となるため、現在は岡山市とその周辺市町の学校を中心に講師をお願いしている。ただ、学校の夏期・冬期休業中などを利用することで県外から講師を招くこともできた。そうした設定の工夫をしていくことで、講師の選定の幅も広げていくことができる。

【講師の勤務地域】

○岡山市	47人
○赤磐市	4人
○倉敷市	2人
○笠岡市、総社市、瀬戸内市、吉備中央町、滋賀県大津市	各1人

3 運営の仕方

講座の基本的な運営スケジュールを、①開会（挨拶・講師紹介）、②テーマの意義についての講話、③講師による基調提案、④グループ討議・協同活動、⑤討議・活動内容の発表と共有、⑥講師によるまとめ、⑦受講者各自のまとめ、として運営してきた。実際の運営にあたっては、それぞれの講座のテーマや講師の思いを生かせるよう、柔軟に変更している。

実施時間については、実施した講座の中には150分に及ぶ講座もあったが、授業化を想定して実施してきた2016・2017年度には、全体の時間を120分以内として運営してきた。その中で、「④グループ討議・協同活動」の充実を図る一方で、「②テーマの意義についての講話」は設定しなかった。

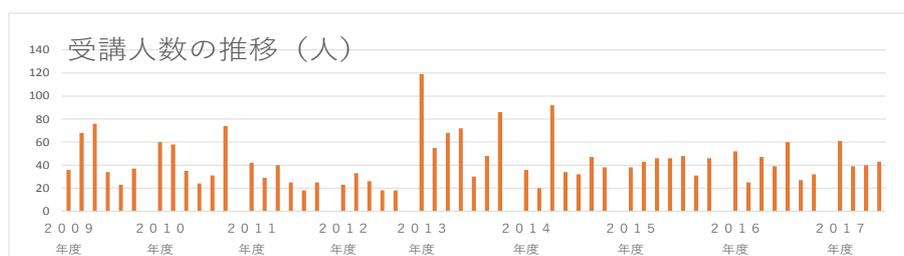
4 講座の受講者

(1) 講座への参加人数

55回の講座（2017年度第4回まで）の受講者の推移は[図1]のとおりである。最も少ない18人から最も多い119人までの受講者があった。受講者の人数は、テーマによる差のほか、実施時期による差も大きい。4年生が教員採用試験を終えた後に受講者が減少する傾向にある。2016年度からは、授業化を視野に入れたグループワークの充実をねらいとして、40～50人程度の受講者を想定して募集を進めてきた。

受講者の学部等の所属は、[表4]のとおりである。教育学部の学生が約9割、課程認定学部の学生が約1割という状況である。

【図1】講座への受講人数



【表4】受講者の所属

小学校教育コース	中学校教育コース	特別支援教育コース	幼児教育コース	養護教育コース	教育学部大学院	養護別科・専攻科	課程認定学部大学院	卒業生	計
1081	356	118	7	165	147	32	203	3	2114
51.1%	16.8%	5.6%	0.3%	7.8%	7.0%	1.5%	9.6%	0.2%	100.0%
81.9%					8.5%		9.6%	0.2%	100.0%

*データ不足の為、2009年度は除いている。

*アンケート未提出の受講者は除いている。

(2) 受講者の講座に対する満足度

講座の受講者には、アンケート調査を実施し、アンケート結果を、「学生の受講者を増やす」「学生の満足度を上げる」という点から考察し、運営改善に生かしている。アンケートの回答は、5つの選択肢（「4」については7つの選択肢）で評価したものと自由記述によるもので行ってきた。

【アンケート項目】

○受講者のこと「性別」「学年」「所属学部・学科」「受験予定の学校種」

○今回の講座

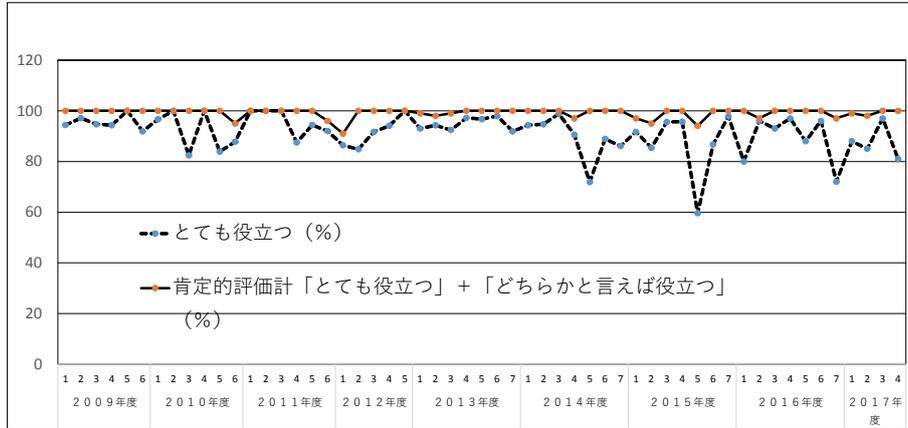
- 1 基調提案（最初のお話）について、どのように感じましたか。
- 2 グループでの話し合いは、活発に行われましたか。
- 3 グループでの話し合い中、あなた自身の発表はどうでしたか。
- 4 グループでの話し合いの時間の長さはどうでしたか。（選択肢7）
- 5 まとめ（最後のお話）について、どのように感じましたか。
- 6 講座で考えたことは、あなたが教師を目指す上で役立つと思いますか。

○本講座

- 7 次回の講座にも参加したいと思いますか。
 - ・今回の講座の感想や質問など、自由に書いてください。
 - ・次回の講座で取り上げてほしいテーマを書いてください。
 - ・この講座のことを、何で知りましたか。
 - ⇒「掲示板」「教職相談室で」「センターHP」「岡大教職ナビの情報」「友人から」「その他」

5 5回のアンケート結果をもとに、受講者の意識をグラフ化したものが[図2][図3][図4]である。

【図2】受講者にとっての有益度



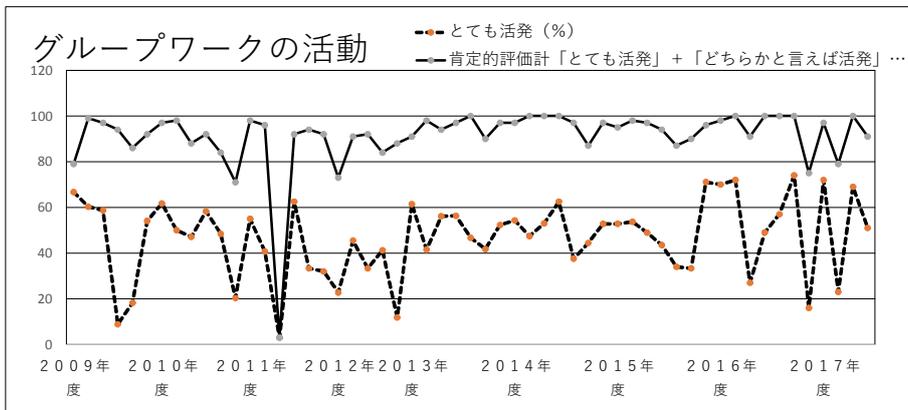
「講座で考えたことは、あなたが教師を目指す上で役立つと思いますか。」という問いに対して、

「とても役立つ」 72～100%

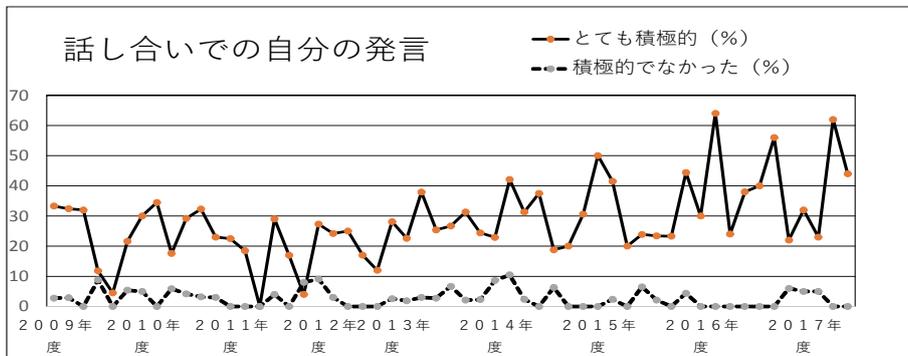
「とても役立つ」 + 「どちらかと言えば役立つ」 91～100%

となっており、受講者にとって概ね有益な講座になっていると言える。一方で、講座によって「とても役立つ」と答えた割合に差があることは課題として残る。

【図3】グループワークでの活動状況



【図4】受講者の発言状況



「グループでの話し合いは、活発に行われましたか。」の問いに対して、

「とても活発」 3～74%

「とても活発」+「どちらかと言えば活発」 3～100%

「グループでの話し合い中、あなた自身の発表はhowでしたか。」の問いに対して、

「とても積極的」 4～64%

「積極的でなかった」 0～11%

となっている。

講座の進め方によって数値が大きく変化しているが、講話中心の講座でも「役立つ」という評価が多かった講座もあり、一概に講座の評価と結びつけることはできない。しかし、受講学生が積極的に自分らしさを発揮して活動して欲しいと期待し、グループワークの充実を図ってきた。受講者の「とても活発に発言できた」の割合に増加傾向が読み取れるのは、うれしいことである。

(3) 講座受講生のアンケート自由記述

受講者のアンケート自由記述についても、「図2」から推測できるように、肯定的な記述がほとんどであった。2017年度実施の一部を前項「Ⅱ 2017年度の実践」「3 学生の感想」に載せているので、9年間の記述については紙面の都合で割愛させていただく。

Ⅳ 授業化の方向

9年間実施してきた「教師力養成講座」を、実践的指導力の向上と学校教育への深い理解を可能にする一つの方法として授業化を進める。授業化にあたってぜひ継続して受講して欲しいという思いはあるが、履修していない学生も受講可能なように講座を開放できる形にしておくことで、学生が学校現場を知る機会を増やたいという思いもある。「優れた実践である」という条件を大切にしながら、学校現場で行われている教育活動を学生に知らせ、受講者が共に考える場としたい。教職を目指す学生にも、学校教育に興味を持っている学生にも、この機会を利用して学校教育へ理解を深めて欲しい。

2018年度開始を予定して準備を進めている授業の概要を記しておく。

<授業科目> 教師力養成演習（学校教育の現代的課題）

<学 期> 年間随時開講（曜日と時間枠は固定する）

<科目区分> 高年次教養科目

<対象学生> 3,4年生

<授業の概要>

学校教育現場における様々な課題について、その現状を知り課題解決能力を獲得することは、教員を目指す学生には、学校現場に対する不安を解消し、意欲的に教壇に立てる自信をつけていく授業となる。また、教員となる学生ばかりでなく、親として、地域人として学校教育に関わる全ての学生にとって有意義であるといえる。具体的には、学校現場や教育委員会などで活躍する方々による基調講話と、そこに内在する学校現場が直面している今日的な課題について、アクティブ・ラーニング

により学生間で意見交換や課題解決方法の検討を行う。

<学習目的>

教職を志望する学生にとって「生徒指導力」「授業力」「教師力」など教職に必要な力を獲得することは必要不可欠である。また、教育学部以外で教職を目指す学生については、直接的に学校現場を知る機会は教育実習期間（2～4週間）のみであり、学校教育の現状を理解し、対応できる力が十分に獲得できているとは言えない。本授業では、身近な学校教育現場における課題を取り上げ、その解決能力の向上を目的とする。また、本学DP「人間性に富む豊かな教養」の獲得に資する科目ともなる。

<授業計画>

年間6～7回の外部講師を招いた講座を実施する。

V 終わりに

9年間の「教師力養成講座」を振り返って、それぞれの年度に社会時勢を加味してテーマを設定し、講師を適切に選定してきていることを改めて感じた。これから教職に就こうとする学生に、教育に関心をもつ学生に、先達の熱い思いとねらいを確かにもった指導の姿を伝えていくことは、これからも続けていかなければならない。授業化という新しい試みの中でも、受講生それぞれが教育にかかわる場で自分の力を発揮するために役立つ確かな場としていきたい。

本年度も、岡山県教育委員会、岡山市教育委員会のご協力をいただき、講座を実施することができた。講座を担当して下さった講師の先生方、高塚教師教育開発センター長を始めとした教師教育開発センターの諸先生方・事務スタッフの方々からは、準備段階からたくさんのご助言とご支援をいただいた。関係の皆様、心から感謝申し上げます。

参考・引用文献

- ◆「2016年度教師力養成講座」の概要—実践的指導力を有する教師の育成のために—
(2017岡山大学教師教育センター紀要第7号)
武藤幹夫・河内智美・小林清太郎
- ◆「2015年度教師力養成講座」の概要—実践的指導力を有する教師の育成のために—
(2016岡山大学教師教育センター紀要第6号)
武藤幹夫・河内智美・小林清太郎
- ◆「2014年度教師力養成講座」の概要—実践的指導力を有する教師の育成のために—
(2015岡山大学教師教育センター紀要第5号)
武藤幹夫・小川潔・小林清太郎
- ◆高度な専門性と実践的な指導力を有する教師の育成プログラム「教師力養成講座」の開発
(2)～(5)(岡山大学教師教育センター紀要第1～4号 2011～2014)
松原泰通・小川潔・山根文男・山崎光洋・高旗浩志・武藤幹夫・小林清太郎・
江木英二・曾田佳代子・笠原和彦・本多功彦・柳原正文

- ◆高度な専門性と実践的な指導力を有する教師の育成プログラム「教師力養成講座」の開発
(岡山大学教育実践総合センター紀要第10号 2010)
松原泰通・小川潔・山根文男・山崎光洋・笠原和彦・本多功彦・柳原正文

Title: An Outline of the Training Program to Cultivate Abilities Required for Teachers in the Last 9 years

Subtitle: To Cultivate Practical Leadership Required for Teachers

Author: Mikio BUTO*1, Satomi KOCHI *1, Seitaro KOBAYASHI *1

Keywords: developing practical leadership skills, 9 years' efforts, transferring the program into an official course

*1 Center for Teacher Education and Development, Okayama University
